研究ノート

応用仏教学への一志向

吉元信行

一　はじめに

筆者は、本学において原始仏教を専攻し、爾来その分野での指導を受けて来た。そして、近年アビダルマなる分野に心を寄せ、特に説一切有部の思想を中心として、大乗仏教との交渉をトレースするという方法論で研究を進めた。その過程において、仏教学とは文献研究を基礎とするものであり、その基礎なしには何も語れないと教え込まれ、そして筆者自身も文献研究を続けて今日に至っている。

周知の如く、インドの仏教を研究する者にとって、パーリ・サンスクリット語などのインド古典語の修得が急務であり、それら古典語テキストの読解作業が大きな比重を占めることになる。その為に、我々の研究も、いきおい重箱の角を穿るようなことに追われ、仏教の全体像が見えにくくなってしまうことにもなりかねない。しかし、釈尊の四諦の教えに見られるように、仏教は本来実践的な宗教であり、仏教学もそのことを忘れて成り立つ筈はない。

そのことは分かっているが、何故か文献を抜きに実践的仏教学を云々することに筆者自身、後ろめたさと言うか、罪悪感のようなものを感じてきたのも事実である。しかし、自身でこのような葛藤を持ちながらも、仏教を仏教学以外の分野より研究しようとする応用仏教学に私かに心を寄せたり（拙書評「Narendra Wagle: Society at the Time of the Buddha」本誌第一二号・七八頁参照）、あるいは、学外でそっと仏教学の実践的在り方についての論文などを幾つか発表したこともある。

今回、「我々スタッフが研究の合間にふと感じたことなどを気楽な気持ちでメモ的に書いてみよう」（本誌三一号編集後記）という趣旨の〈研究ノート〉執筆の機会を与えられたので、大谷大学仏教学の伝統とか、仏教学の基礎としての文献研究とか、また諸々の批判などを気にせず、本当に気楽な気持ちで、このような応用仏教学の課題に曲りなりにも取り組んで来た経過を整理するためにメモ的に綴り、識者の批判・教示を仰ごうと思う。このことはまさに試行錯誤の繰り返しであり、これという纏まった結論には達しないかもしれないが、小論が仏教学を如何に生かすかということを再検討する上の一布石にでもなれば幸甚である。

二　カウンセリングにおける仏教理念の導入

現代の疎外された人間性、そして現代人間の神経症的状況の回復を目指して、種々の方法が講じられてきた。この中でも、新しい心理学の一部門として、カウンセリングが、実施し易く而も有効な方法として、特に要請されるに至った。このカウンセリングの理念は、心理学の応用としての精神分析や心理療法の領域を超えて、より人間の実存に迫り、人間治療という大きな役割を持っているものであり、人間疎外の現代における人間性回復の最も具体的手段として、近年盛んに行なわれるようになったことは周知の通りである。

筆者がこのカウンセリングに興味を持つようになったのは、大学院修士課程に在学中、ある機会で、否応無しに犯罪前歴者の更生補導という現場に立たされた時からである。そこは、犯罪前歴者を収容して、彼らから自助の責任を引き出して、社会に適応するように復帰させていくというケースワークの場であった。それはまた、対象者をして自己目身を理解せしめ、新しい方向を目指して積極的に歩み得るようにしていくというカウンセリングの場なのであった。ここで筆者は、カウンセリングについて何も知らないままに、対象者を補導するという側に立たされた。ところがそこで、私の補導が大変うまくいくということに気が付いて喚驚した。つまり、カウンセリングを全く知らないままに、上手にカウンセリングが出来ていたのである。

不思議に思って、カウンセリングについての勉強を始めることになった。そこで、筆者は、このカウンセリングの理念が、今まで学んできた仏教の理念と全く会通す

るということを知った。つまり、印度中部を遍く遊行して、悩める衆生を救い、大般涅槃のその時まで対機説法をお止めにならなかった仏陀こそ偉大なカウンセラーであり、さらに、仏陀の教え、すなわち仏教こそ、実践的には、実に大きなカウンセリング体系であったということに気が付いたのである。このような観点から、「更生保護会における補導のあり方について」という短文を草し、関係機関に投稿したところ、入賞して掲載された(近畿更保護特集生『わたしの意見』近畿更生保護委員会・昭42・一二〜一四頁)ところを見ると、このような補導の在り方がこの分野からも注目されていたことを示している。こうして、現場での体験に基づき、試行錯誤しつつ、「原始仏教における対機説法の体系——仏教カウンセリングへの一試論——」と題して、本学に修士論文を提出した。この修士論文の一部を発表したのが、拙稿「原始仏教における対機説法」(印仏研一七—一・一二六〜七頁)および「カウンセリングにおける仏教的想念」(犯罪と非行№六・二〜二〇頁)である。その後も暫く、この世界に関り、その方面の学会で研究発表をしたり(「更生保護会における処遇とその体制」昭和四五年一一月二一日・第二回近畿更生保護学会資料・二七〜三一頁)、二三の論文を書いたりした(拙稿「更生保護会におけるカウンセリング導入の問題点」更生保護と犯罪予防№一二・五四〜五七頁、拙稿「更生保護会における処遇の現状と問題点」犯罪と非行№一四・一〇一〜一二二頁)。

このようにして、原始仏教におけるカウンセリング的対機説法の体系を模索しているうちに、大きな難関に打ち当ってしまった。それは、仏陀の言行を最も忠実に伝えているとされる原始経典といえども、決して当時の速記録ではなく、永年の伝承を経て順次に成立したものであり、また、それら諸資料は、仏陀の教説の要目を記憶し易いように纏めたもので、カウンセリングの過程を忠実に記録するという目的で伝承されたのではないということである。そして、カウンセリングが西洋の心理学を背景として成立したように、仏教カウンセリングにも深い仏教の心理学の背景があるということに気が付いたのである。

そのようにして、本学にて研究の場が与えられたこともあって、筆者の研究は専ら仏教の心理学であるアビダルマ、そして更に唯識の心理学へと向かい、暫くはカウンセリングとか仏教の実践的在り方とかということを傍らに置いて、ひたすら原典研究に終始するようになった。勿論そのことを忘れてしまった訳ではないが、その余裕

がなくなったというのが正直なところである。その研究の具体的内容については、小論の目指すところではないので敢えて触れないことにする。

三　ソーシャルワークにおける仏教理念の活用

今から五年位前のこと、筆者は研究室に、ある英国人女性の訪問を受けた。彼女は名前をCordelia Grimwoodといい、イギリスの保護観察官で、ソーシャルワークの専門家である。グリムウッド女史の話を聞くと、彼女が筆者のところに来た目的は凡そ次のようであった。

イギリスでは、ソーシャルワークそのものに限界が来ており、それを打開する手だてとして、仏教の理念が注目され始めた。そこで女史は、ソーシャルワークに仏教理念の活用を試みようとするPh. D論文を執筆すべく、日本の社会事業と仏教の勉強をしに来た。東京の社会事業大学で指導を受け、資料を集めたり人に聞いたりしていたところ、筆者が以前仏教カウンセリングに興味を持っていたことを知り、インタビューに来たのだという。

「ソーシャルワーク」とは、社会福祉事業という意味であり、社会に適応困難な者・社会的落後者・貧困者などに対し、社会的責任においてそれらの問題解決を援助する事業のことである。この概念には、ケースワーク・グループワーク・コミュニティオーガニゼーションなどの科学的処遇技術も含まれる。カウンセリングは、言語的手段によるケースワークであり、この中のほんの一部門に過ぎないのである。そのソーシャルワークに仏教理念を活用しようという話に始めは我が耳を疑っていたが、女史の話を聞いているうちに、女史の意図していることが筆者が嘗て修士論文において目指したことと全く同じであることを知って驚嘆した。その後何回か女史と意見交換の機会を持ち、同じ道を志そうとする者が外国にもいることを知って、意を強くしたのである。

グリムウッド女史は間もなく日本での研修の成果を纏め、早速筆者にも次のようなその研究レポートのコピーと雑誌論文の抜刷が届けられた。

（一）Cordelia Grimwood,“A Brief Look at Social Work from a Buddhist Stance in England and Japan”.（当時未発表）

（二）Cordelia Grimwood,“Studying Buddhism in Japan”.（日本大学精神文化研究所教育制度研究所紀要　第一二集・三九二～三八〇頁）

この二篇の論文の内（二）の方は、女史が日本における仏教についての研究を纏めたものであるから、さして目新らしいところはないが、（一）の論文は、特に得るところの大きいものであった。それは、ソーシャルワークの専門家となる為の訓練を受けた英国の保護観察官が、自分の受けた教育による方法論に限界を感じ、この限界を打破する為に、全く異質の概念である仏教理念を導入することにより、その解決策を見出そうと意図するものであった。その内容は、我々仏教学徒ばかりでなく、ソーシャルワークの実務家をも大いに啓発し、まさに待ち望まれていた内容の論文であったので、早速そのコピーを有縁の人たちに分かったり、また、筆者の担当する文学部一回生の総合Ⅱの講義のサブテキストに用いたりした。しかし、その英文はかなり難解であり、ソーシャルワークの専門用語などがあって、筆者にも理解しにくいところが多々あった。また、該稿に対しては、大学関係の研究者からもあまり反応はなく、むしろ、実務家の方に注目されたようである。

先ず、我が国のソーシャルワーク実践及び理論でのリーダーシップ的立場にある家庭裁判所の若手調査官グループの目にとまり、この論文の論読会が持たれた。このことは特筆すべきである。縁あって筆者もそのメンバーに加わり、彼らと一緒に該稿を読む機会を得た。この成果の一部は家庭裁判所主任調査官・東一英氏（本学社会学科出身）らによって、昭和五六年一一月一五日、名古屋・日蓮宗報恩寺で開催された日本仏教社会福祉学会において、「ソーシャルワーカーと仏教観――英国のプロベーションオフィサーのレポートから――」と題して口頭発表され、会員諸氏にも注目された。その後、このメンバーの中の有志を中心として、保護観察官や大学関係者など実務家と研究者とが集まって、該稿を翻訳しようという話が持ちあがり、定期的に研究会が持たれることになった。そうしている内に、該稿の一部が、プロベーションの実務誌『更生保護』三一―八号に、恒川京子氏によって翻訳され（コーデリア・グリムウッド「日本とイギリスの矯正保護制度について――英国のプロベーション・オフィサーの印象――」）、さらに相次いで、該稿の全原文が *Young East*, New Series Vol. 6, No. 3, 1980. に掲載された。そこで我々は、その輪読の成果を纏め、次のような該稿の全訳を発表した。

桑原洋子・吉元信行・東一英・白浜博子（共訳）「翻訳・日英ソーシャルワーク管見――仏教者的立場からの比

較研究――」犯罪と非行№五九・三五～五九頁。

この翻訳には意外と反響があったので、我々は該稿に対する理解を確認するため、これに論評と訳註を付して、訳文を再録し、次の論文として発表することになった。

桑原洋子・吉元信行・東一英「〝内なる仏性へ〟の自覚とソーシャルワーク――英国人ワーカーからの問いかけ――」仏教福祉第一一号・四〇～六八頁。

社会福祉と仏教の研究者及びソーシャルワークの実務家である我々三人によってなされたこの共同研究は、お互いに裨益するところがあった。これを契機として我々は、更に、その後グリムウッド女史より送られて来た次の論文の輪読に着手することになった。

Cordelia Grimwood and Cliff Howes, "The Social Worker, The Client and Buddhist Ideas", *Social Work Today*, Vol. 15, No. 2, 1983.

この論文は、グリムウッド女史と、嘗て彼女と同じ職場で仕事をしていた首都保護観察所上級保護観察官クリフ・ハウズ氏との共同執筆によるものであり、前の論文で取り上げられた摂受・変易・即今という仏教理念を、ソーシャルワークに適用することの正当性を実証しようと試みた実践的研究である。特に該稿では、仏教理念によって、従来のソーシャルワークにおいて主流をしめていたワーカー・クライエント関係におけるラベリングを否定しようとするものである。近年、ケースワークにおける診断主義あるいは機能主義に飽きたらない力動派と呼ばれる人々の抬頭が見られるし、また、精神医学の分野でも、治療者の役割と活動は、関与しながらの観察という方向に動きつつあるとのことである。つまり、「癒す者」と「癒される者」というレッテルづけを否定しようとするラベリング否定論は、ソーシャルワークだけでなく、現在の臨床諸科学の最大の課題となっているようである。そのラベリング否定の論拠を仏教思想に求めたところに、この論文の意義がある。

我々三人は、この共同研究の成果の一部を第十九回日本仏教社会福祉学会において口頭発表した（桑原洋子・吉元信行・東一英「ソーシャルワークにおける仏教理念の活用――イギリスのソーシャルワーカーの研究に学ぶ――」昭和五九年二月四日於仏教大学四条センター）。なお、この発表は、早速『中外日報』紙上に取り上げられ、評価された（昭五九・一一・一九日号・一〇頁）。この発表の詳細は、該稿の訳註を加えて、本年度の同学会の紀要に掲載された（日本仏教社会福祉学会年報第十六号・八一～九九頁）。

四　社会福祉と仏教

日本における社会福祉の原点は、言うまでもなく仏教理念にある。その代表的な社会福祉政策の源流は、聖徳太子や弘法大師の事業に求めることが出来るであろう。また、近世の社会福祉事業は、主として仏教寺院あるいはその団体を中心として発展して来たようである。しかし、戦後、西洋思潮の突入による価値観の急変などにより、この社会福祉政策にも大きな変遷が見られるようになった。そして、そこにおける考え方にも、西洋的な思想が導入され、仏教的背景を土壌とはしているが、西洋的社会福祉思想が主流を占めながら今日に至っている。

ところが、周知の如く、このような西洋中心の思潮にも種々の歪みのあることが指摘され始めた。今日に見る環境破壊より生まれた公害の生態学的危機の根源を、キリスト教の世界観の内に認めるという反省も、西洋人自身によってなされるようになった。上述の論文におけるグリムウッド女史らの提言もまさにこの点から出発している。

女史らは、西洋における社会福祉思想の源泉を聖書にある次のような「よきサマリア人の物語」に求めている（『新訳聖書』ルカ伝・一〇章三〇～三五節）。

よきサマリア人は、強盗に遭ってどうすることも出来なくなっている被害者に出会った。彼は全てのものを奪われ、傷にも手当てが必要で、最寄りの宿屋に運ばれねばならなかった。彼が独り立ち出来るようになるまでには、永い年月を要するであろう。豊かなサマリア人は、その被害者のために諸事万端整えた上で、必要とあらば何時でも援助する旨、宿屋の主人に言い残して立ち去った（上記論文における同物語の要約・抽訳）。

この「よきサマリア人の物語」は、まさに美徳である。しかし、このような社会福祉観には限界があると西洋の人たちも気が付き始めた。飢餓に悩まされているアフリカにおける諸問題がその一例である。表面的な援助をすればするほど、彼らは働かなくなり、飢餓の進展にいよいよ拍車をかけているというではないか。世界一の長寿国になった我が国における老人福祉の問題も爾りである。数年前、ヨーロッパ諸国を訪ねたとき、福祉先進国のイギリスやフランスの公園のベンチで坐っている老人たちの寂しそうな目だけが筆者の脳裏に焼きついている。その同じ目を、今日、ひたすらゲートボールに興じる老

人たちや、敬老の日に長寿で祝福されている養老院の老人たちに見る。

救助者と被害者・ワーカーとクライエントという二元論的な考え方に立つ限り、両者はお互いの立場に拘束されてしまう。そしてワーカーの方は、知らず知らずに悪女の深情け的援助者となり、クライエントの方は、自分の被害者としての立場に酔いしれて、自らの内なる可能性を見失ってしまうことになりかねない。仏教では、そういう医療モデルからの脱却（解脱）を説き、人は過去・現在・未来を通じて自分の生き方に責任を持ち続けていくという業の思想を教える。そして、大乗仏教では、万人に内なる可能性（仏性）を認めようとさえするのである。

仏教における社会福祉の源泉は、言うまでもなく、菩提樹下における覚りの法楽の座を捨て、人々のために覚りの内容を示された仏陀の初転法輪にあると言えよう。そして、そこにおいて説かれた四諦の教えに基づく対機説法の方法論がまさに仏教カウンセリングに他ならない。このような仏教福祉の流れに、更に四無量心や六波羅蜜・四摂法などの仏教理念が合流し、そして、大乗菩薩道という仏教福祉の大河へと展開したのである。

この大乗菩薩道は、あらゆるものは一如であるという深い東洋思想を背景としている。東洋の思想は、決して対立世界から生じたものではなく、むしろ、自然の大地から産み出されたものである。法という理法は永遠不変のものであるとする確信から生まれた過去仏の思想や、釈尊は無限の過去世から衆生にたいする無数の善行を修して来られたとする仏陀前生の菩薩の物語はこのことを明らかにするものである。

社会福祉における仏教的理解の仕方は、価値観を押しつけたり、ラベリングをしたり、分析したりすることではない。人生におけるあらゆるものごとは、相関的関係にあって変容するものであるから、是か非かということはありえない。そうなれば、ワーカーは必ずしも救助者である必要もない。逆に、ワーカーは、専門家として、また人間として、なすべきことをクライエントから学ぶことさえある。ワーカーとクライエントは、喜びも悲しみも諸々の体験を一緒に開示し合い、共有し合い、一期一会ということを感得することによってより豊かなものになっていく。『華厳経入法界品』における善財童子の求道物語はまさにクライエントを善知識とする菩薩道ではなかろうか。

五　むすび

このように、社会福祉の実務の分野にも仏教理念が注目され始めたが、心理学の分野においては、そのことはもっと顕著である。その代表的な例が、ユングを始めとする深層心理学に見られるのは周知の通りである。ところが、近年抬頭して来たニューサイエンス運動（思考や五官を超えた運動の全体性である暗在系の理論を提唱する）、中でも「我々の内に固我意識を超えた意識の層が存在する」と主張するトランスパーソナル心理学に至っては、インド古代の「梵我一如」の思想や、仏教における「仏性」の思想そのものに迫っているということが出来る。その主張の一部を紹介すると、凡そ次の如くである（春秋№二六九・八～一八頁参照）。

過去数十年の意識研究によって得られた観察結果は、意識が物質より上位にあることを示唆している。究極的には、個人の意識は、宇宙的意識あるいは宇宙の心と同一化する。人間は、宇宙のあらゆる部分に体験的に接近出来る潜在的な力を持っている。つまり、人間は宇宙的ネットワークそのものである。

物質より精神が優位を占めるという考え方は、既に古代インドにおいて人間を物質的存在である色蘊と、精神的存在たる受・想・行・識の四蘊に分析する五蘊論に認めることが出来るであろう。また、宇宙的ネットワークの自覚は、まさに瑜伽行者たちの目指した人間そのものの追究というところにあった。このことは、西洋の人々が東洋の精神に触れて、東洋とか西洋とかの区別を超えて、歴史的必然性として、人間の本質に根ざした在り方に気付き、そのことに価値を見出し始めたと考えることが出来るのではなかろうか。

いずれにせよ、以上取り上げてきたような種々の問題提起は、本来、我々仏教徒が理論構築して、内外の研究者や実務家に提示すべき課題の筈である。この役割を我々が等閑視している間に、逆に必ずしも仏教徒とは言えない外国の人々から、精神医学や心理療法、更にはソーシャルワークにおける仏教理念活用の必要性を指摘されたことは残念なことである。

本学が仏教的教育と仏教学研究の最高学府を目指す大学であるならば、このような応用仏教学や仏教の実践的在り方の研究から決して目を背けてはならないであろう。むしろ、本学において、そのような研究も仏教学の一分野として認められる日の来ることを待ち望むものである。